

日本の出品にみるフィラデルフィア万国博覧会（1876 年）と パリ万国博覧会（1878 年）の関連

坂本 久子

Relationship of the Japanese Attendances and Exhibits between Philadelphia International Exhibition of 1876 and Paris Universal Exposition of 1878

Hisako Sakamoto

Abstract

The Paris Universal Exposition of 1878 was held just two years after the Philadelphia International Exhibition, and the attendance to the Exposition was decided during the term of the Exhibition of 1876. Although there seemed to be a relationship between both exhibitions, there were some differences. In this report, these relationships are considered, along with the differences through the commissioners of both exhibitions, the exhibitors who visited and had activities at the both places, and the design book for Japanese exhibits, *Onti-zuroku*. It also introduces the Japanese buildings which were erected at both exhibition sites by Japanese carpenters. The exhibitors of these buildings at both exhibitions were different.

Japanese exhibits at the Paris Universal Exposition of 1878 led to a crazy boom in Japonisme in Paris. However Japonisant in France doubted the progress of Japanese art and decorative art, because of Japanese opportunism toward Western culture after the Meiji Restoration.

Key Words: Centennial Exhibition, Paris Universal Exposition of 1878, Japanese exhibits

1. はじめに

フィラデルフィア万国博覧会は1876年に開催されたが、その2年後にパリ万国博覧会¹⁾は開催されている。明治政府がパリ万博への参加を決めたのは、フィラデルフィア万国博覧会が開催されている期間中のことであった。パリ万国博覧会への参加の表明は素早くなされ、1876年6月15日にフランス政府からの書簡がフランス代理公使を通じて提出されたが、検討の結果、8月17日には右大臣岩倉具視(1825-1883)の名前でパリ万国博覧会への参加が布告されている²⁾。パリ万国博覧会へは、フィラデルフィア万博での経験を何らかの形で踏まえて、「殖産興業」の一環として、参加したであろうと推測されるが、もしフィラデルフィア万国博覧会との間で変化があればどのような部分であろうか。

先の論文³⁾でも紹介したように、「ジャポニズムのパリにおける盛行を促した大きな動因として、1867年のパリ万国博と、それからほぼ10年を経て開催された1878年のパリ万国博への日本の参加があったことは、すでによく知られている。」⁴⁾と説明されている。そして「1867年のパリ万国博覧会が、パリにおける大衆的ジャポニズムの盛行を促したと同様に、またそれ以上の規模をもって、一層1878年のパリ万国博における日本の参加は、パリの大衆的ジャポニズムの輪を広げていった。」⁵⁾とも言われている。この万国博覧会への日本の参加は、その後のジャポニズムの流れにとって大きな意味をもっていたのである。

本論文では、フィラデルフィア万国博覧会とパリ万国博覧会との関連を、いくつかの事象を通して考察すると共に、変化を感じさせる出来事についても合わせて考察してゆく。

2. パリ万国博覧会事務官とフィラデルフィア万国博覧会事務局との関連

パリ万国博覧会における明治政府の事務官は、「佛蘭西巴里府萬國大博覽會報告書 第二篇 日本部」によると、総計23名で、その内フランスに派出された者は12名、日本に留まった者は7名、フランス公使館に勤務し事務官になった者は4名であったと記述されている⁶⁾。フランスに派出された事務官は、その名前をこの報告書の中に明記されている(図1)。一方、フィラデルフィア万国博覧会では「米國費府博覽會報告書 第二」の中にある「米國費府博覽會委員人名表」に掲載された委員の人数を数えると、87名である⁷⁾。またフィラデルフィアに赴いた事務官は、同報告書の「米國費府博覽會渡航人名表」⁸⁾(図2)の中の「出品人」と「大工職」「左官職」「瓦葺職」を除いて、その人数は39名である。これからみるとパリ万国博覧会では大幅な事務関係者の人員減がみられる。

このようにパリ万国博覧会では事務官の大幅な減少がみられたのは、なぜであろうか。一つにはこれは国内の事情によるのではないかと推測される。つまり当時の明治政府は地租改正や各地の士族の反乱を抱え、そして、1877年(明治10年)には西南戦争が起こっている。万国博覧会への参加も消極的な声も聞かれるようになったという。それを推し進めて、かろうじて中止を免れたのは大久保利通の後ろ楯があったからだと言われている⁹⁾。また「起立工商会社」のような会社が設立されて¹⁰⁾ 政府の事務局としての仕事が削減されたのかもしれない。

大久保利通は、フィラデルフィア万国博覧会では総裁を勤めている。彼は殖産興業推進の一

図1 パリ万国博覧会の事務官

○第二篇 日本部 第一章 事務官之事 我が政府は、本會參事ノ議決セシ事務官候補等并ニ其ノ職務ニ十三名其内他國ノ派出セシ者十二名在國ノ者七名佛國公使館在勤ノ者四名トス今派出セシ人名ヲ左ニ舉ゲ 事務副總裁 大橋 正義 事務官 前田 正名 御用取扱 石原 豊貫 御用取扱 久保 弘道 御用取扱 平山 成信 大橋 正義 谷 謹一郎 二階堂 秀三郎 内務省 出仕 成嶋 謙吉 御用取扱 兼松 直利 三田 信 大橋 靖 河原 徳立 總裁 松方正義 事務官長 前田 正名 實ラレテ松方正義ハ事務官長ノ兼任ニ解キ九月文部大臣書信ハ本會ニ文部省ノ出品ヲ監督スルヲ教育ノ事ニ關連スルヲ爲メニ派出セシナリ 派出國ノ内事務ヲ分チ三科トス其各員左ノ如シ 出品科二名 河原 徳立 久保 弘道 平山 成信 谷 謹一郎 二階堂 秀三郎	事務官前田正名ハ明治十年十月八日東京ニ於テ佛國公使館ニ赴キ預メ事務ノ調理ヲサセリ其後行ハ大橋靖ナリ 佛國派出松方正義總裁島公使館事務官ハ前ノ大久保總裁ノ公達ニ由リ左ノ名稱ニ改メナリ 總裁 松方正義	佛國西巴里府萬國大博覽會報告書 ○第二篇 日本部 第一章 事務官之事 我が政府は、本會參事ノ議決セシ事務官候補等并ニ其ノ職務ニ十三名其内他國ノ派出セシ者十二名在國ノ者七名佛國公使館在勤ノ者四名トス今派出セシ人名ヲ左ニ舉ゲ 事務副總裁 大橋 正義 事務官 前田 正名 御用取扱 石原 豊貫 御用取扱 久保 弘道 御用取扱 平山 成信 大橋 正義 谷 謹一郎 二階堂 秀三郎 内務省 出仕 成嶋 謙吉 御用取扱 兼松 直利 三田 信 大橋 靖 河原 徳立 總裁 松方正義
---	---	---

資料出典：佛蘭西巴里府萬國大博覽會報告書 第二篇 日本部

図2 フィアデルフィア万国博覧会の渡航人

出品人 中橋 真彦 永田 八郎 河村 堂 飛鳥 舟 高田 一 伊藤 秀次郎 佐官 職 魚木 幸吉 山口 幸吉 中野 幸吉 大工職 中野 幸吉	出品人 中橋 真彦 永田 八郎 河村 堂 飛鳥 舟 高田 一 伊藤 秀次郎 佐官 職 魚木 幸吉 山口 幸吉 中野 幸吉 大工職 中野 幸吉	出品人 中橋 真彦 永田 八郎 河村 堂 飛鳥 舟 高田 一 伊藤 秀次郎 佐官 職 魚木 幸吉 山口 幸吉 中野 幸吉 大工職 中野 幸吉	出品人 中橋 真彦 永田 八郎 河村 堂 飛鳥 舟 高田 一 伊藤 秀次郎 佐官 職 魚木 幸吉 山口 幸吉 中野 幸吉 大工職 中野 幸吉
--	--	--	--

資料出典：米國費府博覽會報告書 第二 日本出品目録

環としてまた日本の国際的地位を高める方策として万国博覧会への参加に積極的であった。そして、パリ万国博覧会でも総裁に就任したが、1878年（明治11年）5月14日に石川県士族らにより暗殺された¹¹⁾。パリ万国博覧会は同年5月1日開幕式を迎え、5月20日からの開催であったから、まさにその直前の出来事であった。総裁は副総裁であった松方正義が勤めた。

「佛蘭西巴里府萬國大博覽會報告書 第二篇 日本部」には、佛国に派出せし者として図1に示すように12名の名前が明記されている。その名前を取り上げると、「事務副總裁」（後に総裁）松方正義、「事務官」前田正名、石原豊貫、久保弘道、「御用取扱」平山成信、谷謹一郎、諏訪秀三郎、成嶋謙吉、兼松直利、三田信、大橋靖、河原徳立である。これらの人々のなかでフィラデルフィア万国博覧会にも赴いたのは、石原豊貫、久保弘道、三田信の3名であった。また、平山成信は「澳國博覽會參同記要」を田中芳男とともに著した人であり、フィラデルフィ

いる。このことは、万国博覧会を支える人々に民間の力が次第に増してきたのではないかと推測されるのである。

そして、パリ万博での「起立工商會社」の渡航人の中には、19世紀末のヨーロッパで美術商として活躍した林忠正の名前をみることが出来る。

4. 二つの万国博覧会の会場構成と日本の出品物の展示

日本の出品物は、双方の万国博覧会でどこに展示されたのであろうか。フィラデルフィア万国博覧会については、その会場構成と日本の出品物の展示場を、拙著「フィラデルフィア万国博覧会における日本の出品物の会場構成」¹⁴⁾に詳しく述べている。その概略を示すと、会場内に建てられた大小さまざまな建物 194 棟のうち、合衆国百年祭委員会（United State Centennial Commission、以下委員会と略す）が建てた主要な会場建築の一つである本館（Main Building）に、この万国博覧会の出品物分類の内、第一大区の鉱物及び冶金術、第二大区の製造物、第三大区の教育及び知学、第四大区の美術に属する日本の出品物が展示された。第四大区の美術の出品物は、本来ならば委員会が建てた美術館に陳列すべきものであるが、本館に陳列された。そして、第六大区農業の出品物は、委員会が建てた主要な会場建築の一つである農業館に展示された。また、女性百年祭委員会（The Women's Centennial Committee）が建てた女工館（Women's Pavilion）にも第二大区製造物からの日本の出品物が展示されている。

会場内には二棟の日本の建物が建てられた。一棟は「日本家屋」であり、もう一棟は「日本賣物店ノ建築」で、二棟とも日本の出品物であった。

一方、パリ万国博覧会ではどのような日本の出品物がこの万国博覧会会場のどこに展示されたのであろうか。出品物の概略は「佛蘭西巴里府萬國大博覽會報告書 第二篇 日本部」の第二章にみることが出来る¹⁵⁾（図3参照）。その部分を取り出してみると下記の通りである。

一大區	美術	無	六大區	機械工業及器具製造法	7 個
二大區	教育及ヒ其用具方法等	1,512 個	七大區	食用品	2,041 個
三大區	家具及ヒ附屬品	25,158 個	八大區	農業及ヒ養魚法	18 個
四大區	織物衣服及附屬品	11,043 個	九大區	園藝	3,986 個
五大區	採拓工業及原品製造品	1,551 個			

注）報告書中の個数の漢数字はアラビア数字に変えている。

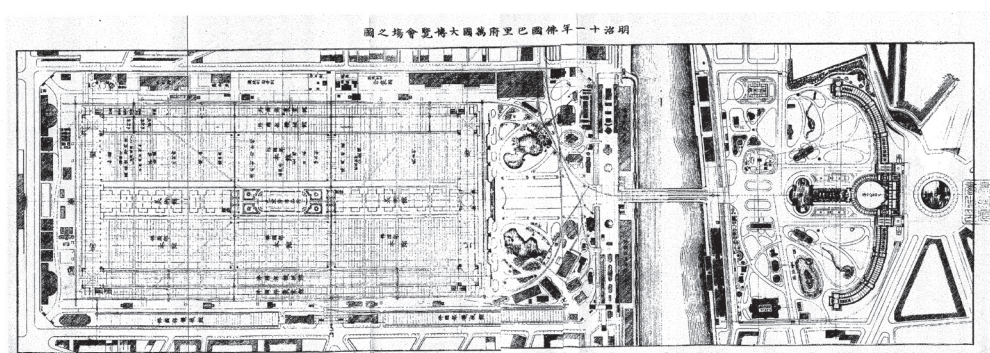
この中で最も多い出品物は三大区の「家具及ヒ附屬品」であるが、これは大部分が陶磁器、漆器、金属器などの工芸品で占められていることが確認されている¹⁶⁾。フィラデルフィア万国博覧会の際は「第四大区美術」に分類されていた日本の出品物があったが、それらは本来なら美術館に展示されるところを展示されず本館に展示された。しかし、これらの出品物の多くは西洋の人々の眼から見ると美術工芸品の範疇に入るものであったと推測される。パリ万国博覧会で、「一大區美術」の出品物が「無」となっているのは、フィラデルフィア万国博覧会の経験を踏まえたからかもしれない¹⁷⁾。

パリ万国博覧会の会場構成については「佛蘭西巴里府萬國大博覽會報告書 第一篇 博覧会總論」¹⁸⁾の第二章に記述されており、「佛蘭西農商務省定額金決算表」¹⁹⁾の付表に会場平面図や俯瞰図が添付されている。これらの資料を基にしながら、会場構成の概略と日本の出品物の展示場について次に述べる。

パリのセーヌ河を挟んで南岸に「シャル・ド・マルス」と北岸に「トロカデロ」との二つの会場でこのパリ万国博覧会の会場は成り立っていた。図4に会場配置図を、図5にその俯瞰図を示す。これらの図の右手が北にあたる。

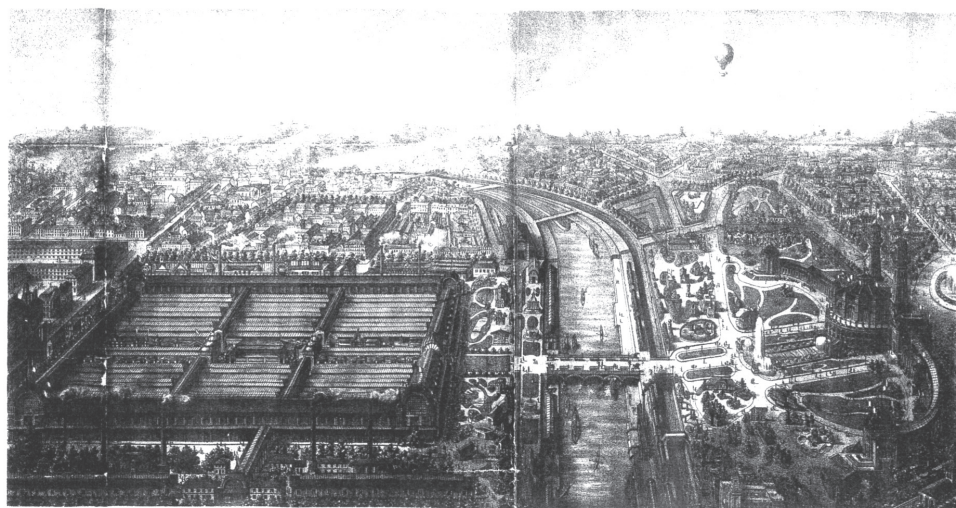
シャル・ド・マルスの会場は、南北軸の中央に美術館を、それを挟んで東西にほぼ対称形に

図4 パリ万国博覧会の会場配置図



資料出典：佛蘭西農商務省定額金決算表 付表

図5 パリ万国博覧会の会場俯瞰図



圖景真面外場會覽博國萬府里巴里八十七百八千

資料出典：佛蘭西農商務省定額金決算表 付表

図6 パリ万国博覧会シャル・ド・マルスの日本展示場への入口



資料出典：図説万国博覧会史 吉田光邦編

順次、本館、機械館、農業館を設けている。そして、美術館の東側はフランスの展示場であり、西側は各国の展示場であった。更に、東端にはフランスの機械館が付加されている。イギリス、アメリカ合衆国などは、更に展示場の背後の西端にも会場を設けた。農業館はセヌ河沿いにも建てられている。日本の展示場は、各国に充てられた会場の南北軸のほぼ中央にあった。両隣は支那（中国）とイタリアであった。図6はシャル・ド・マルスの日本の展示場への入口を示したものである。

トロカデロの会場には、中央に高さ50メートルもある「圓形の巨館」の建物を建て、その建物から弓状の「回廊」が左右対称形に伸びていた。円形の巨館は劇場のような造りであり、会期中の諸会議の場を提供したり、諸式を行うのに使われた。両腕のように伸びた弓状の回廊は、「古器物ノ陳列場」であった。東に伸びる回廊はフランスの、西に伸びる回廊は各国の展示場となっていた。そして、日本の古美術がこの各国の陳列場の中に展示された。

また、トロカデロの会場は、北に高く南に低い傾斜地であった。その傾斜を利用して、中央正面に階段が設けられ、噴水が設置された。日本、支那（中国）、エジプト、チュニス、アルゼリア等の国々は、自国風による建築の家屋をこのトロカデロに建てた。日本は、日本風の家屋を日本庭園と共に、噴水の南西の位置に建てたのである。

5. 温知図録と二つの万国博覧会との関連

『温知図録』とは明治八年から十四年頃にかけて博覧会事務局（内務省管轄）および製品画図掛（内務省、大蔵省、農商務省と管轄が移動）の官員が編纂した図録で、当時の万国博覧会や内国勸業博覧会に出品する工芸品の制作のためあるいは貿易拡大のために、彼らが考案して

全国の工芸家に与えた図案、または工芸家が提出した図案を修正したものを、当時の画家が筆写した八十四帖からなる図案集である。」²⁰⁾とされている。この八十四帖は全四輯から成っており、第一輯は明治9年のフィラデルフィア万国博覧会出品のために作成した下図を諸工に配布するため、あるいは諸工の求めに応じて各工が作成した図案を修正したものと言われている。そして、第三輯は明治11年のパリ万国博覧会向けに作成された図案を集めたものであると推測されている²¹⁾。

フィラデルフィア万国博覧会では、この『温知図録』の図案そのものと思われるものあるいはそれに近い図案の出品物を、当時の日本の会場を写した写真の中に認めることが出来て²²⁾、この図録の中の図案の一部と実用性については考察されている。パリ万国博覧会については、この図録の実用性を裏付ける資料を見出せていないが、フィラデルフィア万国博覧会の例からみて実用に供されたものと推測される。

『温知図録』での工芸品の図案指導は、明治8年から明治18年の11年間でであろうと言われている。これらの期間に明治政府が工芸品のデザイン指導に関わり、二つの万国博覧会の出品を行ったことが推し測れる。

6. 万国博覧会場内に建てられた日本の建築

先に説明したように、フィラデルフィア万博の会場には二棟の日本建築が建てられた。その大工棟梁を務めたのは松尾伊兵衛であった。二棟の建物は「日本家屋」と「日本賣物店ノ建築」であり、これは日本の出品物であった。「日本家屋」は、会場の北西にあるジョージ・ヒルの麓に建てられ、日本の万国博覧会関係者（英文の資料ではJapanese workmenと記述）の宿舎として実用に供された。従って、万国博覧会を訪れた人々はその外観しか見ることが出来なかった。一方、「日本賣物店ノ建築」は本館の北西の端を外に出た場所に建てられ、本館内における日本の出品物展示場からも近い位置であった。ここでは日本の物品が売られており、人々はその建物を訪れることが出来た。

パリ万国博覧会では、「佛蘭西巴里府萬國大博覽會報告書 第二篇 日本部」の第二章に「三井物産會社ニテ大工三名ヲ渡航セシメ『トロカデロ』園中ノ家屋ヲ組立テ落成ノ後直ニ歸國セシメタリ」¹⁵⁾という記述があり、三井物産會社が日本からの大工を使って建物を建てたことを知ることが出来る。しかし、フィラデルフィア万国博覧会においては、渡航人名表に大工の名前、左官職や瓦葺職の名前は明記されていたが、パリ万国博覧会ではその名前は明記されていない。また指揮を取った大工棟梁の名前もなく大工だけで建設したようで、人数も格段に少ないのである。フィラデルフィア万国博覧会ほど建設する日本の建物に力を入れなかったのか、また複雑な造りの建物ではなかったということであろうか。

「明治十一年佛國博覽會出品目録」には第六大区に「三井物産會社」による「日本風ノ門、同家屋」の出品物名が記述されており²³⁾、このパリ万国博覧会の日本建築も日本の出品物であったことが分る。また、「佛蘭西巴里府萬國大博覽會報告書 第二篇 日本部」の第五章には次のような記述がある。「園ノ中央ニハ國風ノ小茶室ヲ築キ室内ニ銅、陶、漆器及ビ蒔繪ノ

小書棚、花鳥の書帖、盆栽等ヲ散置シ來客アレハ此室ニ延ヒテ我茶菓ヲ供セリ」²⁴⁾。このことから判断すれば、この「日本風の家屋」(図7)は、室内を見えるようにし(図8)、そこには日本の工芸品を飾り、また茶室としての役割も持たせ、お茶を振舞ったことが分かるのである。大島清次氏は、この「日本風の家屋」を「農家」と記述している²⁵⁾。そのことはフランス人のシェノー²⁶⁾が、その著書の中でこの家屋を説明している表現が農家であったからかもしれない。先に紹介した「佛蘭西巴里府萬國大博覽會報告書 第二篇 日本部」の第五章の中の記述には、次のような部分もある。「池ノ側ニ水田ヲ作り米ヲ種ユ」「園中處々ニ花壇ヲ作り諸艸木、穀物、野菜ノ各種ヲ分チ植エ」「二三所ニ竹柵ヲ結ヒ中ニ鶏及ヒ家鴨トヲ放ツ」²⁷⁾とあり、万国博覧会用に展示された「家屋」は、建物の外の演出をふくめて、「農家」を感じさせるもの²⁸⁾であったのであろう。そして、この「家屋」の室内には調度品が置かれて、内部を見ることが出来た。フィラデルフィア万国博覧会の「日本家屋」では外観だけを見せた建物であり、1876年4月13日に副総裁の西郷従道がこの建物に入った後は、日本の博覧会事務局は建物内部を公開せず、万国博覧会を訪れた人々は大変がっかりしたとの報告²⁹⁾もある。このような状況を踏まえて、パリ万国博覧会では、建物内が見えるようにし、また、日本の工芸品が生活の中でどのように使われているかを例示するのに役立たせようとしたのかもしれない。

そして、「獨り体裁ノミナラズ木材モ本邦ヨリシ職工モ亦本邦ヨリス」²⁷⁾と記述されていることから、パリ万国博覧会もフィラデルフィア万国博覧会と同様に、日本からの建築資材を運んで、日本の職人の手で建てられたことが分かる。

また、次の記述もある。「園中東南ノ一隅ニ小茅店三字ヲ作り三井物産會社、七寶會社、銅

図7 パリ万国博覧会トロカデロでの日本庭園と日本風の家屋



資料出典：図説万国博覧会史 吉田光邦編

図8 パリ万国博覧会トロカデロでの日本風の家屋
(図7奥の日本風の家屋を右手に回込んでみた室内と考えられる。)



資料出典：ジャポニズム 大島清次著

器會社等ノ雜小品ヲ販賣ス〔トロカデロ〕ノ賣店トハ即チ是ナリ」²⁷⁾とあり、日本庭園の中に三棟の小さな茅葺の建物を建て売店とし、実用に供されたのであった。

7. おわりに

パリ万国博覧会の政府事務官は、フィラデルフィア万国博覧会に比べて格段に少なく、また、パリ万国博覧会に赴いた人も少ない人数であった。これは当時の内政の事情であったと考えられるが、御雇外国人もその中にはいなかった。しかし、出品人の渡航者はフィラデルフィア万国博覧会と遜色はなかった。これらことは次第に民間の人々が、万国博覧会において力を付けてきたといえるのかもしれない。

パリ万国博覧会では、フィラデルフィア万国博覧会と同じく日本の美術工芸品、つまり、陶磁器、金、銀、銅器などの金属器、漆器などが人気を集め購入されていた³⁰⁾。日本流行はパリでの大衆的な広がりを見せ、これは、もはや熱狂であり、狂気であるとまで言われた³⁰⁾。

日本の美術品の展示は、日本人の手によるものだけではなく、フィリップ・ビュルティ³¹⁾の出品、そしてフランスで活躍した人々の日本美術コレクションであるギメ・コレクション、ビング・コレクション、ヴィアル・コレクションなどの日本美術品も、このパリ万国博覧会に展示された。また、日本美術の影響を受けて制作されたフランスやイギリスの陶磁器も、この万国博覧会に展示されている。

こうした日本の美術工芸品への高まりのなか、商業主義の影響による質の低下が危ぶまれてきた。またヨーロッパの趣味に合わせるために作られた日本の工芸品の独創性の喪失を嘆く人

も出てきた。明治維新の前から日本の美術工芸品を収集してきたパリのジャポニザンにとって、明治維新後すでに10年を過ぎて西欧化に向っていた日本の状況から生み出される輸出用美術工芸品への違和感を抱き始める人が出てきても不思議ではなかったとも指摘されている³²⁾。

そして、この時すでに日本美術の独特の空間感覚や色彩感覚を身に着けてきていたフランスの芸術家による次の時代の新しい芸術運動の台頭はよく知られているところである。

註

- 1) パリ万国博覧会は、1855年、1867年、1878年、1889年、1900年、1925年、1937年と幾度も開催されている。本論文でパリ万国博覧会と記した場合は、1878年に開催された万国博覧会を指し、その他の年に開催されたパリ万国博覧会は、その頭に年号を付けて記述する。
- 2) 寺本敬子 フランスにおける「日本文化」の受容と生成（森村敏己編：視覚表象と集合的記憶 第5章） 旬報社 p.138-p.139 2006
- 3) 坂本久子 日本の出品にみるフィラデルフィア万国博覧会とウィーン万国博覧会の関連 近畿大学九州短期大学研究紀要 第38号 p.2 2008
- 4) 大島清次 ジャポニスム 美術公論社 p.49 1980
- 5) [註4] 前掲書 p.113
- 6) 佛國博覧會事務局 佛蘭西巴里府萬國大博覧會報告書 第二篇 日本部 原本・国立国会図書館所蔵 p.1 1880（復刻 フジミ書房 1998）
- 7) 米國博覧會事務局 米國博覧會報告書 - 第二 原本・国立国会図書館所蔵 p.1 - p.5 1876（復刻 フジミ書房 1998）
- 8) [註7] 前掲書 p.28 - p.32
- 9) [註2] 前掲書 p.139
- 10) 瀬木慎一氏は「起立工商会社」について次のように説明している。「当初は単に『工商会社』というブッキラボウな社名が示すように、政府のエージェンシーとして設立された会社だが、営業の必要から、間もなく、『起立』という固有の名称を掲げることになって、欧米で開催される博覧会のための出品と会場運営の業務を遂行する。同時に、それらの出品物を各地から漫然と集めるのではなく、目標に適うものを計画的に生産する場を設けて、自発的に制作にもあたる。」（瀬木慎一：林忠正と三人の重要人物 [林忠正シンポジウム実行委員会編：林忠正 - ジャポニスムと文化交流 ブリュッケ p.104, 2007]）として、「主として国際博覧会のための政府事業を代行し」た。（前掲書 p.105）
- 11) 落合功 大久保利通 - 国権の道は経済から 日本経済評論社 p.1 - p.6 2008
- 12) [註6] 前掲書 p.6 - p.9
- 13) 東京国立博物館編 明治デザインの誕生 国書刊行会 資料 p.69 1997

- 14) 坂本久子 川上秀人 松岡高弘 フィラデルフィア万国博覧会における日本の出品物の会場構成 近畿大学九州短期大学研究紀要 第 27 号 1997
- 15) [註 6] 前掲書 p. 9
- 16) [註 2] 前掲書 p. 142
- 17) 寺本敬子氏によると、フランス政府の公式カタログの「美術」の項には日本の出品物が記載されており、実際にこれらは陳列されたと報告されている ([註 2] 前掲書 p. 142)
- 18) 佛國博覧會事務局 佛蘭西巴里府萬國大博覧會報告書 第一篇 博覧會總論 原本・国立国会図書館所蔵 p. 17 - p. 21 1880 (復刻 フジミ書房 1998)
- 19) 佛國博覧會事務局 佛蘭西農商務省定額金決算表 原本・国立国会図書館所蔵 付表 1880 (復刻 フジミ書房 1998)
- 20) [註 13] 前掲書 p. 13
- 21) [註 13] 前掲書 p. 16
- 22) 坂本久子 写真と『温知図録』からみたフィラデルフィア万国博覧会の日本の出品物への一考察 近畿大学九州短期大学研究紀要 第 28 号 1999
- 23) 佛國博覧會事務局 明治十一年佛國博覧會出品目録 原本・国立国会図書館所蔵 p. 80 1880 (復刻 フジミ書房 1998)
- 24) [註 6] 前掲書 p. 22 - p. 23
- 25) [註 4] 前掲書 p. 117 - p. 120
- 26) エルネスト・シェノー (1833 - 1890) フランスの美術評論家。
- 27) [註 6] 前掲書 p. 23
- 28) 桂離宮の庭園内に建てられた松琴亭や笑意軒は、田舎の簡素な民家とか田舎家風の茶屋と賞される建物であり、そのような風情をこの「日本風の家屋」に求めたのかもしれない。
- 29) Dallas Finn Japan at the Centennial : 1876, The East Vol. XIII, No. 1, 2, p. 86 1976
- 30) [註 2] 前掲書 p. 146
- 31) フィリップ・ビュルティ (1830 - 1890) フランスの批評家で日本美術愛好家。ジャポニスムという言葉は 1872 年にビュルティによって産み出された。
- 32) [註 4] 前掲書 p. 125 - p. 126

* 本稿は、日本デザイン学会第 55 回研究発表大会 (2008) での同名の口頭発表に基づいて、加筆・訂正を行ない作成したものである。